

CMCポップイ安倍小学校

小森 茉奈

私は、小学五年生の頃にCMCと出会い、大谷さんの話を聴きました。地雷により苦しむ人々が大勢いること、電気やガス、水道の通っていない生活の厳しさ、そして当時の私たちと同じ年くらいの子どもたちもその環境の中で暮らしているということ。そんな話に私たちは衝撃を受け「自分たちにできることはないか」と考えました。その結果、アルミ缶を集めて換金し、そのお金をCMCに寄付することにしました。みんなで話し合いを重ね、放課後や休みの日に集まってアルミ缶を集めました。そうして集まったお金で、CMCポップイ安倍小学校にため池を掘ることに成功しました。その池は「MAINOSATO ALUMICAN POND 2004」と名づけられました。

2013年2月、ついに私はCMCのスタディツアーに参加し、ポップイ安倍小学校を訪れました。小学校に着くと、たくさんの子どもたちが私たちを出迎えてくれました。お互いに挨拶をした後、3つに分かれたクラスの授業風景を見学しました。一番小さい学年のクラスは、私たちツアーメンバーが気になりながらも、真剣に授業を受け、とても元気いっぱい、学年が上がるごとに落ち着いた雰囲気での学習に取り組んでいました。この小学校自体、私が小学生のころに写真で見ていたままで、校舎を少し離れて眺めたときに本当にここに私が来たんだ！と感動したことを覚えています。

そして、大谷さんに連れられポップイ小学校のすぐそばにある「MAINOSATO ALUMICAN POND 2004」の前に立ちました。そこには茶色く濁った水の上、一面に蓮の葉が広がる、あのアルミ缶ポンドがありました。写真で見て、イメージしていたものよりも少し大きくて、はっきりとしてそこにありました。また、この茶色の濁った水は今でも、生活用水として使われているうえに、牛にも、そして人にも飲まれています。こんな水を実際に飲んでいるのかというショックと、それでも自分たちの活動により今でも命の水を現地の人々に提供することができるのだという誇りの2つの気持ちで少し複雑でしたが、9年前の活動が今でも遠く離れた国に形として存在していることを自分の目で、肌で感じることができました。また、この池の前に立った時にこみ上げてくるものあり、その当時に達成できて、やってきて良かった！と思ったあの大きな喜びと達成感の次に、やって良かった、と思うことができました。改めて、この活動をするきっかけとなった大谷さん、CMC、先生方、活動を支えて協力してくださった方々にお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございます。

私はこの日の、この時の気持ちを忘れることはこれから先ないと思います。そして、これからも世界に目を向けて、自分たちにできることというのを考え、行動していこうと思います。

キリングフィールド トゥールスレン収容所

私たちは、ポルポト時代に大虐殺の行われたキリングフィールドという場所と、厳しい拷問が行われ、人々が収容されていたトゥールスレン収容所という場所に行きました。

まず、キリングフィールドとはポルポトが自分の政治の矛盾を見抜きうると考えた知識人の医者や教師などを中心に虐殺していった場所です。また、知識人だけではなく勉強をしていると思われる、めがねをかけている人や手のやわらかい人、一般市民も数多く殺されました。その、殺された人々の入っていた穴がキリングフィールドには129個もあり、そこには2万人もの人々が埋められていました。その人々の見つかった頭蓋骨が中心としてある慰霊塔には、見たこともない数の人の頭蓋骨があり言葉を失いました。今でも雨季の後には骨が浮き上がってきていて、毎年新しい骨が見つかります。実際に、私たちの足元にも人の骨や衣服がありました。ここで聞いた話は、どれも残酷でした。首の後ろを竹の棒でたたかれ穴に落とされた、首をナイフなどで切られて殺されることや子どもは両足を持って木にたたきつけられて殺されたことなど、どれも耳をふさぎたくなるような話でした。同時に、そんな殺し方をしている、させている人の気持ちや思考が分からず、同じ人間として考えられないと思いました。

次に、トゥールスレン収容所についてです。トゥールスレンはもともと学校でしたがポルポト時代に拷問を行ったり、その人々を収容する場となりました。今では国立の国際的博物館として世界中の人々が見ることができます。私たちはそこで、生き残った方の1人のお話を実際に聞かせていただきました。実際に使われていた道具や部屋を見ながら聴く話は、とても残酷で心が痛くなりました。つめを剥がれたり、電気ショックを受けたり、ムチで打たれたりと考えただけでも恐ろしいことが実際に起こっていたのです。私たちの見ているその部屋やベッドや鎖も当時のもので、床には今でも血痕が残っていました。そして、トゥールスレンはその当時の写真が何枚もあり、死んだ人や収容されている人々の姿が写っていて当時の状況を自分で想像することもできます。また、拷問をされるときの絵や拷問の道具の使い方の絵もあり、どれほど残酷な拷問が行われていたのかがわかります。私はこの場所を見てまわり、話を聴くたびに、ずっと眉間にしわがよっていた気がします。

私は、この二つの場所でカンボジアの残酷な歴史の深い部分を知り、感じることができました。耳をふさぎたくなるような話、目をそらしたくなるような場所やものがたくさんありました。しかし、この現実を自分の耳で目でしっかり聞いて、見ることはとても大切で、そらしてはいけないと思いました。この事実はこれからの人や政治のあり方について考えさせられるものがあり、このできごとはこれからも多くの人々が知るべきことだと思います。そして、今の物騒な世の中という私たちの生活と比較し、平和とは何なのか、改めて考えさせられるきっかけになりました。